

第6回UTA会に用意した資料を掲示します。参加する方は、予習をお願いします。

## 意識の流れの学びを進める

### I 入門

1. 学びを始めた動機を確認する。
2. 自分の宗教遍歴を振り返る。
3. 本、意識の流れ増補改訂版と続意識の流れ改訂版を繰り返し読む。
4. ホームページ意識の流れあなたに話しかけましょう田池留吉を毎日開いて読む。

### II 実践・じっくり基本を

1. 母親の反省  
母親にしてもらったこと、してもらえなかったこと、してあげたことを ノートに書き出す。  
母親に使ってきた心を思い起こす。
2. 0歳の自分に向ける瞑想  
母親の温もりを感じる。

3. 田池留吉を思う瞑想

田池留吉に心を向ける、合わせる、委ねる。

田池留吉の世界、温もり、優しさ、大きさ、広がり、パワーを感じる。

III 実践・しつかり応用を

1. 田池留吉のメッセージを受ける。本物かどうか波動を確認をする。

2. 自己供養

自分の闇・過去世を受け入れる。

自分の闇と共に、母親に、田池留吉に心を向ける。

自分の闇が喜びに変わる。

3. 来世との出会いと供養

250年後の自分、300年後・次元移行した自分と出会う。

4. 死後の自分との交信

IV 実践・愛の放射塔

1. 田池留吉と交信・質疑応答する。

2. 意識の転回、更に更に進める。
3. 田池留吉と「私はあなた、あなたは私、一つ」だと確信する。
4. UFOに心を向ける。UFOと交信する
5. 宇宙に心を向ける。宇宙と交信する。愛が宇宙に流れる。
6. 一切はエネルギー、愛・温もり、優しさ、喜びだったと悟る。

学ぶ動機が間違っていれば、そして修正がなければ、  
一歩も前には進めないでしょうか。

塩川香世

田池留吉です。はい、学ぶ動機を見直すこと、そして、その間違いを修正していくこと、自分で修正していくこと、それがなければ、この学びは一歩も前には進んでいません。一歩もです。

肉では学んでいる、学んできたような感覚があるかもしれませんが、動機が違えば、足をその一歩を踏み出すことができているか後退しているかもしれません。

どうぞ、皆さん、学ぶ動機を見つめ直してください。

学び始めは仕方がないです。皆さん、ほぼ全員の方が、その動機が違っています。肉的に色々な悩みを抱えて集ってくる人もあれば、パワーがほしい、チャネラーになりたい、そういうことで集ってくる人もいます。

それぞれの中で、しっかりとその動機を見つめ直すことから、まず始めてください。そこが違ってれば、本当に前には一歩も進めないのです。

たとえ、目の前の問題がいい方向にいったとしても、それで真実の世界を学ぶ正しい軌道に乗っているとは決して言えません。

また、セミナーに集ってくれば、鈍感な人も敏感になってきます。敏感になったから、分かるということではありません。それはもう殆どの人はお分かりだと思えます。

要は学びの動機をしっかりと見つめ直し、そして、自分に誠実に素直になることです。素直、これは難しいですよ。殆どの人が素直ではありません。己が偉いです。偉いからこそ、20年以上の年月、時間をかけても…というところがあります。

しかし、いつも申していますように、意識の流れは滞りなく流れています。私達は、その計画通りに流れている流れのもとに、ただ淡々と次元移行へ思いを向けているだけです。

その流れに逆らっている生き方、存在の仕方をしていないか、それを問うチャンスがこれからの

転生に用意されているということですよ。

すべての意識にそれを問うチャンスが用意されています。

意識の流れは滔々と流れています。どうぞ、自分を救済する道にその一步を歩めてください。

人は、なぜ死を恐怖するのか。死を忌み嫌うのか。

死ぬことを考えていないわけではないけれど、

なぜそこを避けてしまうのでしょうか。

塩川香世

それは、それぞれの心の中に死んだ後の自分、死んでからの自分、それを知っているからです。肉体を離せば、どのような状態になっていくか、自分の心で本当は皆さん知っているのです。しかし、それを認めたくはないんです。見たくはないんです。

肉を持っている今、必死にその思いを見ないように、見ないように、避けて、避けて、遠ざけていつているだけなんです。意識的にそうしている人もいれば、無意識のうちにそうしている人もいます。

しかし、すべてに共通なのは、皆さん、死んだ世界を知っているということです。自分が死んだらどのようなか知っています。

知っているけれども、どうしようもないんです。だから、今、目の前に広がっている世界に、自分のすべてを向けていくんです。目から耳から身体全体で、今、目に見えている世界と通じ合うことをただひたすらやっているだけです。しかし、そういうことで、死の恐怖が消え去ることはないことも皆さん、知っています。

人間いつかは死ぬ、そう言っただけで自分の心をごまかしている場合も多々あります。

死を考えたくない。死ぬのが怖い。これが肉を本物とするところの偽らざる本音です。

その中で、死後の自分と語りなさいと、今、促されていることが、どういうことなのか分かりますか。考えたくもない、触れたくもない死後の自分を、今、心で感じなさいということが、本当の優しさだと分かりますか。

自分を救えるのは、肉を持っている今しかないということが分かりますか。肉を持っている今だからこそ、自分を自分で供養できるのです。

自分の供養は自分しかできないということが、心で分かってきたなら、ただひたすら、自分に伝えるはず。何を伝えるか。今、自分に本当に伝えなければならぬことを、学んでください。私は申し上げてきました。どうぞ、皆さん、本当に自分を救う、自分に本当のことを伝えられるよ

うな学びをしてください。

真つ暗闇の中にいる自分に、はっきりと心から伝えていけるあなたであってください。

そして、できれば、肉を離したあとも、自分を供養できるまでになつていただければと思います。それよりも何よりも、まずは肉を持つている今、暗闇の中に沈んでいる自分にどれだけのものを伝えていけるか、それを日々淡々と試みてください。

肉を離したあとも、自分を供養することができるということについて、

もう少し語ってみてください。

塩川香世

肉を離したあとも、自分を自分で包んでいけるということは、田池留吉、アルバートのメッセー  
ジを肉がなくても聞けるということが条件となつてきます。肉がなくても、田池留吉、アルバー  
トのほうに心を向けられるということです。

心を向ける。向ければ広がる世界を感じる。その世界を感じるからこそ、自分の中に優しさと温

もりが広がっていく。そして、その世界で自分と対話する。自分に問いかけ、自分が答える。もちろん、心の針は、田池留吉、アルバートを指している。

簡単に言えば、肉を離れたあとも、自分を供養するということは、このようなことです。肉を持ちながらすることを、肉がなくても、肉を離れたあともできる。それは、まさに、田池留吉、アルバートの中にある自分を心で確立していることが必要です。

肉を持っている間は、肉を通して、自分の出す思いを確認することができます。そして、お母さんのお腹にいた頃の自分に思いを馳せて、ああ冷たかったなあ、間違っていたなあ、苦しかったなあ、そうやって、自分に思いを向けることをやっていると思います。いわゆる、反省、瞑想ですね。

それが、肉がなくてもできるかと言えば、私、田池留吉、アルバートに心の針がピツタリと合わすことができていると、自分の心で確信がなければ、まず無理です。心の針を合わせるのは頭ではありません。肉を持っている間は、合わせよう、合わせようとしてできるかもしれません。

しかし、その肉を離してしまえば、意識、心だけ。合わすも何も、ピツタリひとつであれば…と  
いうことです。

その感触というか感覚は、心で知っていく以外にないことはお分かりだと思えます。

「死後の自分と語る」は5月25日締め切りました。送信者数127+a。大方の人は、試みてよかつ



たと思っておられるようでした。しかし、更に、もっと続けて欲しいと思っています。5月のセミナーでは、20名ぐらいの方に前に出てもらい、一緒に学びたいと思っています。その時は、まず、田池留吉に自分の心を向け、合わせ、委ねてから、死後の自分の方に心を向けるようにしてください。まだ時間がありますから、試みておいてください。

## 学びの友の反省

私の瞑想はこれでいいのでしょうか、自分自身に問うてみました。

「良い瞑想、悪い瞑想、それを知りたいという思いはどこから来るのでしょうか、瞑想に行き詰っていますか、あなたが願うような成果が得られないからでしょうか、何を求めているのですか、もう一度原点に戻って、素直な赤子の気持ちで瞑想を続けてください。

比較の心があるのではないのでしょうか、根本に他力で培ったエネルギーがあなたを動かしているのではないのでしょうか。自分が善しとする瞑想の実態を心で感じてください。どうですか、田池留吉の波動を感じますか、違うのではないのでしょうか、今だからはっきり伝えたいのです、方向が、

心の向け先がずれています。

もつと自分の中にある他力のエネルギーを確認していってください、さらなる自己供養をお願いします。

自分が望むような瞑想、それこそ大きな間違いではないでしょうか、瞑想とは意識の世界です、その意識の世界すらも肉の思いで支配しようとするのですか。

どんな瞑想でも、あなたにとっては必要なのです、そこから学んでいってください。自分と真向かいになって自分自身と対話を進めていってください。私はそれを待っていたのです」。

## セミナーへの予習①

学びの動機について、最初にこの学びを知ったときのことに思いを向けてみました。

覚えているのは、「あなた、金持ちやな」という言葉と、「すべての宗教は間違っている」という二つの先生の言葉です。この二つの言葉をかみ締めています。

両方ともに私は反発しました。金持ちと言うのも「そんなことはない」と思ったし、宗教が間違えいと言うのも分かりませんでした。みんなが拝んだり祭ったりしているのに、それが間違いか・・・なんとと言う事を言う人だ・・・だから、先生に失礼な言葉を出しました。先生は本物ですかと・・・

「この人は霊道が欲しいのです、でも私はこの人が愛しいから霊道は与えません。この人がすべてを捨てた時、私はこの人が欲しいものを与えます」

この言葉が今でも耳の奥にこびりついています。学びの動機・・・霊道でした。能力が欲しかった。認めて欲しい、この私を・・・いいえ、この私を認めよ、田池留吉、我を認めよ、そしてそのもつと奥には「田池を殺せ、打倒田池」の旗印が掲げられていた。己一番、アマテラスのエネルギーの存在を、今こそはっきりと感じます。

ああ、このエネルギーが私をこの学びに誘いました。私に肉を持たせ、肉持った田池留吉に出会うため、私は河内の地に嫁いで来た。今世、この時を逃してはならない、この時を待っていた、そんな思いが伝わってくる。どんなに己を誇っても、栄耀栄華を極めても、心の中を吹きすさぶ寒々しい空虚な寂しさを決してうずめることはできなかった。今なら分かります、アマテラスが何を求めてきたのか、何を叫びたかったのか・・・お母さん、お母さんと呼びたい、温もりを感じたい、安らいだ自分に戻りたい、ああこの心をこの心を・・・

学びへの動機は欲でした。霊道という能力への欲でした。そしてその能力を持って己を現し、田池留吉の宇宙に私の優位さを示すこと、そんな大それた欲望を心に潜ませて、私はこの学びに入りました。そんな心で集まっていると言う自覚もありません、長い間大きな顔をして先生の前に座って話

を聞いてきたのです。

「みんな私を殺しにやってきたのです・・・そうです、そうだったのです、なのにこんなに長く学ばせていただきました。すべてを受け入れ、すべてを愛に返すエネルギー、戦いを挑んできた私  
が本当に求めていたのは田池留吉だった、心から求めていた波動が田池留吉だった、間違った動機で、  
間違った歯向かう心で何食わぬ顔をして集ってきたのに・・・それを思うと、温もり優しさが本当  
の愛のパワーだということをつくづく思います。

今でも己を現したい、認めさせたい、己一番、この思いはどつかりと私の心にあります。けれど  
もこの心の裏には、母を求め、寂しいと孤独の底でうずくまる自分があることを感じ、ともにお母  
さんをおもうとする優しい自分をまた思い起こさせてくれます。

学びへの動機を心に問うとき、愚かな自分を見るとともに、母の温もりに帰りたいと叫ぶ私をしつ  
かりと受け止めてくれた田池留吉に、限らない優しさと許しをいただいてきたと、ただただ感謝し  
かありません。アマテラスの心のままに学びに吸い寄せられるように集わせていただきました。私  
はそんな自分に、真実に帰りたいと言う心の叫びを聞き、私の中に流れる意識の流れをしつかりと  
感じます。

今世という時間と空間、この肉をいただき、自らの計画を遂行できるチャンスを手にできたこと、  
大切に大切に生きていきます。

## セミナーへの予習2

どれほど意識が聞けたかさんの言葉を出せても、すべては闇の中、真つ黒なエネルギーの垂れ流しに過ぎなかった。我こそはと己を誇りに誇り、田池留吉の世界の中で、愛の中でやりたい放題やらせていただきました。挙句の果ては「田池留吉を支配してやる」という私の本音を前面に出して、我一番という冷酷無比なアマテラスの世界を具現して参りました。

やればやるだけどんどん深みに入り、苦しみが増すと言うことも分ならず、私はこの学びをしていると大きな自信と自負を持って生きてきた。お母さんの反省、こんなものチョロコイものだ、そう本気で思うほど私は驕り驕っていました。それなのに、私の肉の生活は次々に苦しい現象が起こる。これほど頑張っているのになぜ？いいや、これこそ試練、私を試す試練なのだ、乗り越えられない試練はないと先生は言っておられる、そうだ、私の力を試されているのだ、本当にそう思い自分を励ましてきた。

色々な出来事があつたけれど、とうとうどうしようもないところまで来て、実家の母としばらくの間暮らすことになって、初めて母の反省がまったくできていない、母の温もりをが分かっていることにうすうす気付きました。肉の母の前に、私の心から出て行く思いは凄まじいものでした。「早く死んでしまえ、いつまで私を苦しめるのだ、いい加減にしてくれ」こんな思いはまだ生易しいもので、言葉に出しては言えない思いが私の心から噴出しました。「肉のお母さんをどれほど見ても、

何も分かりませんよ」これが先生からの言葉でした。

同居から半年で、母はあっけなく亡くなってしまった。私は一人取り残された思いで腹立たしかった。母の最期、「握手しよう」と「あんたも元気でな」と握った母の手の感触が忘れられず、あの握手は何だったのかと何度も何度も母の意識に聞きました。その頃からお母さんの思い、温もりが心に響くようになりました。

私は病気で体の自由が効かない母の看病に実家に帰ったと思っていた。いいえ、帰ってやる、世話をしよると思っていました。けれど本当は私が余りにお粗末なのを見かねた母が、その身を呈して教えてくれたのだと、あの握手はたくさんの意味を語っていたのだと、初めて「お母さん」の存在の大きさを知りました。

肉の母がどんな姿でもよかった、母に出す思いが私の心をすべて露にしてくれた、もう隠しようもありませんでした、そこには肉の母ではなく、大きな大きな温もりのお母さんがありました。お母さんありがとう、その思いが噴出して今も続いています。

温もりがどんなものか、どんなに優しいものか、母から伝わる思いが田池留吉から伝わる思いと同じだと、そして私の中にもあるということ、感じ始めました。

母の温もり、それをどれだけ言い続けてこられたか、学びの最初から「お母さんの反省」ばかりでした。「またか・・・」と、不遜な思いを出し続けた私は、本当に地に落ちた自分だったことを思

い知りました。

母を見下げ、足蹴にし、切捨て、死んでくれとまで思った私が、自分自身をもまた見下げ、足蹴にし切り捨ててきたことを知りました。

「お母さん」、この言葉の響きが温かく心に響きます。ゼロ歳の自分を思うとき、やっと心が安らぎ安心できる自分に出会います。心を裸にして、すべてを委ねることの喜びを、母から伝えていただきました。この心がすべての反省を誘ってくれます。心が乱れ、何も感じられなくなったとき、母を思います。母の温もりの中に戻れる自分を確認します。いつもこの繰り返しです。

母の温もりの感じられない心からは、真実の世界は分からない、田池留吉も、本当の自分も、本当の喜び幸せも何もない、真実から遠い遠い世界だと言うことを知りました。

私の中のすべての意識が、お母さんと素直に呼べることを望んでいます、それが嬉しいから、幸せだから、本当の自分だから・・・

本当に母の温もりを心に取り戻すことこそ学びの第一歩であることを、そしてそこから喜びの道が始まることを、私は心から素直に喜びたいと思います。

セミナーへの予習を通して、もう一度自分の心を確認できる機会をいただきました。改めて自分と対面していきます。ありがとうございます。

### セミナーへの予習3

「私と欲とは合いません」この言葉はセミナーの中でずっと言い続けてこられた言葉です。

私の学びの動機は欲でした。その欲は肉、肉を基盤としたところから出た私の心です。その心をしっかりと持ったまま、学びに集ってきました。これではいくらやつても、いくら瞑想して感じたと言っても、その奥にあるのは己偉い自分でした。長い間、ただ集ってきただけで、学んではいなかった、命を懸けて学んではいなかった、自己満足のお遊びにしか過ぎなかった。

ただ、セミナーの会場は、その場に肉を置くだけで田池留吉の世界を感じられたし、無意識のうちに心が安らぎ、母の温もりの中にいる自分を垣間見ることができた、それが嬉しくて足を運んできたのだと、今改めて思います。

肉持った田池留吉に出会い、真実の波動を伝えていただき、闇出しを通して自分の実態に遭遇してきたにもかかわらず、あまりにも己が偉く、聳え立った心では自分を変えていこうとか、真実に帰ろうと言う学びの本道の道筋に至りませんでした。時ここに至ってもまだ、自分の甘さに気付けない状態です。

いくら本を読み、ホームページを開き、瞑想を重ねても、心の底に欲を潜ませているは、その欲を余計に膨らませるだけでした。それでも本当の私は、「間違っているよ、しっかりと心を見なさい」



と促してくれていた。私は本当に自分のために生きてきただろうか、学んできただろうか、それが突きつけられます。

田池留吉を思い、心に向け、心を合わせ、すべてを委ねる・・・これは欲を持つてはできません。ましてや「私はあなた、あなたは私、私たちはひとつ」は、決して分かりません。

ああ、どれだけ己が偉く、強欲で、無知なのか・・・今頃ようやくそんな思いになっています。

田池留吉のメッセージを受けることも、それが本物であるかどうか、自分の心を見ればはっきりします。

私はあまりにもこの学びに対し、田池留吉に対し、傲慢すぎました、見くびってきました、それを言葉だけではなく、これが私でしたという思いでおります。本当に真摯な心に欠けていました。「私はこの学びに命を懸けています」という田池留吉の言葉に、私はただただ頭を下げるしかありません。「私は、真実に触れた人間の笑顔が見たいのです。ただそれだけです。」という田池留吉の言葉に、私は己が恥ずかしくてたまりません。

そして、私はやっと自分を安心して委ねることのできる人に出会った、本物に出会った、これが私の捜し求めていた学びだと、心から懺悔とともに喜びが湧き上がります。

私は、最初から間違っていました。

この学びは、一体どういうものなのか、心にガツンと響かせぬままきました。

「素直に真摯に」と言われてきたことが、今、少しだけ分かります。

\*\*\*という肉を前面に出したまま、そのままでの学びの前に立ちました。

己を表したい、つつがなく一生を終えたい。

その目的地に向かい霊道を開くことが最良最速の道と、まったくの我流で突き進み23年も経ちました。

この学びこそは最高のものと、「生長の家」の延長線上で、生きる支えと思ってきました。

「分からない、何にも分からない。」と未だに言っている私の目的と結果でした。

最初から、私はこの学びのスタートラインにも立っていないければ、当然、ゴールもありませんでした。終着点を見据えた出発点に立たなければ何にもならない。

単発的にチヨロチヨロ反省まがいのことをやったところでそれだけのこと。ただの自己満足でした。一番大事な「母の反省」がそうでした。

私の目的は、ただ温もりを感じたいから、ただそれだけでした。

正しい道の上にあつて、素直に心を見ていたら、どんな思いの主なのか、それこそが私そのものだと。

苦しい自分がいっぱい詰まっていることに気が付けたはずでした。

「反省」そのものが分かっていかなかったです。

「心を見る」ということが何のためなのか、こんな初歩のことさえ分かっていなかったです。

「心の叫び」を聞くことをせず、偉い私は、苦しいなんてとんでもない、我慢と忍耐、知らんぷりして全部押さえ込んできて、その上で、はたきをかけて掃除しているような反省でした。

前回からのセミナーから半年、私は、この肉の協力で、とことん諦めません。